古英語強変化動詞（Ⅳ）

森　基雄
Mori Motoo

前回(Ⅲ)で扱った強変化動詞１類に続き、今回はさらに２類と３類の現在時制と過去時制の成り立ちについて具体的に考察していくことにするが、１～３類の元来の基本的な語根構造はまったく同じIE e（～ o ～ゼロ）プラス共鳴音（1類ではi、２類ではu、３類では鼻音または流音）プラス子音である。

２類

ēoC ～ ēaC ～ uC ～ oC (OE bēodan ‘to command’ ～ bēad ～ budon ～ boden, OS biodan ～ bōd ～ budun ～ gibodan, OHG biotan ～ bōt ～ butun ～ gibotan, ModHG bieten ～ bot ～ boten ～ geboten, ON biōþa ～ bauþ ～ buþu ～ boþinn, Go biudan ～ bauþ ～ budun ～ budans)＜Gmc eu ～ au ～ u ～ u＜IE eu ～ ou ～ u ～ u (Gk eleúsomai ‘werde kommen’ (未来) ～ eilḗloutha (完了) ～ éluthon (アオリスト)；speúdō ‘hasten’ ～ spoudḗ ‘haste’；leukós ‘weiß’ ～ loūsson ‘weißes Kernholz’ (＜IE *loukjom)；peúthomai ‘hear of’ ～ eputhómēn (アオリスト)；pheúgō ‘flee’ ～ éphugon (アオリスト))。

bēodanの現在時制

	直説法	仮定法	命令法
単数１人称	bēode	bēode	
２人称	bīetst	bēode	bēod
３人称	bīett	bēode	
複数	bēodaþ	bēoden	bēodaþ
不定詞	bēodan		
分詞	bēodende		

直説法単数の２人称bīetstのtst、３人称bīettのttは前回(Ⅲ)の１類rīdan ‘to ride’ の場合と同じ事情によるものである。すなわちbīetst＜POE *bīodist＜*biudist (OS biudis, OHG biutis, Go biudis)＜IE *bheudhesi、bīett＜POE *bīodiþ (OS biudid, OHG biutit, Go biudiþ)＜IE *bheudheti (Gk peúthomai ‘I hear of’, Skt bodhati ‘he notices’) という音過程の結果であり、語根母音IE eu＞Gmc eu が iu に、さらに(iu＞) īo が īe となっている原因は次音節のiによるi-ウムラウトである。

bēodanの過去時制

	直説法	仮定法
単数１人称	bēad	bude
２人称	bude	bude

3人称	bēad	bude
複数	budon	buden
分詞	boden	

直説法単数1、3人称bēadの語根母音は完了単数を表すo-階梯IE ouに由来し、bēadはまさに完了単数のSkt bubodha (＜IE *bhoudh-) に対応する。直説法単数2人称の語根母音は古ノルド語、ゴート語では1、3人称と同じであり、完了の接辞IE -tha(＜-tX2e) の反映が結合したbauzt、baustであるのに対し、古英語ではアオリストに由来すると思われる、語根母音がゼロ階梯のbude (OS budi, OHG buti)であり、従って形態論的には例えばGk pheúgōのアオリスト単数2人称éphugesに相当すると考えられる。直説法複数budonの語根母音は単数2人称と同じゼロ階梯であるが、完了複数に由来する。このことはサンスクリット語の同根語において完了単数1，3人称が語根母音にアクセントを持つbubódhaであるのに対し、完了複数（1人称）がbubudhimáであることからも明らかであろう。仮定法、分詞の語根母音はゼロ階梯に由来する。

bēodanの変化表以外でのアプラウトによる古英語の同根語としては、いずれもゼロ階梯のGmc *budan＞bod ‘Befehl, Gebot’; Gmc *budōn＞boda ‘Bote’; Gmc *budilaz＞bydel ‘Büttel, Herold’; Gmc *budsni-＞bysen ‘Vorschritt, Auftrag, Gleichnis’ がある。

2類の縮約動詞としてはtēon (＜POE *tēohan＜WGmc *teuhan) ‘to draw’ ～ tēah ～ tugon ～ togen (OS tiohan ～ tōh ～ tugun ～ togan, OHG ziohan ～ zōh ～ zugun ～ gizogan, ModHG ziehen ～ zog ～ zogen ～ gezogen, Go tiuhan ～ tauh ～ tauhun ～ tauhans, Lat dūcere); flēon (＜POE *flēohan) ‘to flee’ ～ flēah ～ flugon ～ flogen (OS fliohan ～ flōh, OHG fliohan ～ flōh ～ fluhun ～ giflohan, ModHG fliehen ～ floh ～ flohen ～ geflohen, Go þliuhan ～ þlauh ～ þlauhun) があり、縮約動詞を含め、現在時制における語根末子音がゲルマン祖語の無声摩擦音を反映する動詞には時制の変化に伴うヴェルネルの法則による語根末子音の交替が見られる。現在時制における語根末子音hは命令法単数WGmc *teuh＞tēoh ‘draw’、直説法単数2，3人称*teuhist、*teuhiþ＞(i-ウムラウト) *tiuhist、*tiuhiþ (OHG ziuhist、ziuhit)＞*tīohist、*tīohiþ＞(i-ウムラウトと中略) tīehst、tīehþにおいては明確であり、前回(Ⅲ)で述べたように、このtēonのすべての現在時制形が1類のtēon ‘to accuse’＜WGmc *tīhan (OHG zīhan) のそれと完全に一致する。

縮約動詞以外のものとしては語根末子音がGmc þを反映するsēoþan ‘to boil’ ～ sēaþ ～ sudon ～ soden (OHG siodan ～ sōd ～ gisotan, ModHG sieden ～ sott ～ sotten ～ gesotten)、また語根末子音がGmc sを反映するcēosan ‘to choose’ ～ cēas ～ curon ～ coren (OS kiosan ～ kōs ～ kurun ～ koran, OHG kiosan ～ kōs ～ kurun ～ gikoran, ModHG kiesen ～ kor ～ koren ～ gekoren, Go kiusan ～ kusun ～ kusans); lēosan ‘to lose’ ～ lēas ～ luron ～ loren (OS liosan ～ loran, OHG liosan ～ lōs ～ lurun ～ loran, ModHG verlieren ～ verlor ～ verloren ～ verloren) などがある。

ヴェルネルの法則を伴うtēon、cēosanの過去時制

	直説法	仮定法
単数1人称	tēah、cēas	tuge、cure
2人称	tuge、cure	tuge、cure
3人称	tēah、cēas	tuge、cure
複数	tugon、curon	tugen、curen
分詞	togen、coren	

語根末子音がGmc sを反映する不定詞cēosanでは語根末子音は母音間で有声化され[z]となり、過去時制のうち正

常階梯のcēasでは語末にあったため[s]のままであったのに対し、ゼロ階梯の形ではすべてrとなっているのはGmc sがヴェルネルの法則によりzとなり、さらにそれがWGmc rとなった結果である（OE, OS betera, OHG bezziro, ModHG besser, Go batiza ‘better’; OE snoru, OHG snur(a), ModHG Schnur, Skt snuṣā́ ‘daughter-in-law’）。そしてcēosanではこの語根末子音の交替のほか、語頭子音（Gmc k>）[k]と[tʃ]の交替も起こり、現在時制とcēasでは二重母音の第１要素である前母音の影響により子音は口蓋化されて[tʃ]となったが、cēas以外の過去時制では語根母音が後母音u、o であったため語頭子音は[k]のままであった。同じ条件下で語頭子音の同様の交替を示すものに gēotan ‘to pour’～ gēat ～ guton ～ goten（OS giotan ～ gōt, OHG giozan ～ gōz ～ guzzun ～ gigozzan, ModHG gießen ～ goß ～ goßen ～ gegossen, ON giōta ～ gaut ～ gotinn）があり、語頭のｇは軟口蓋摩擦音のGmc [γ]に由来し、これは前記の[k]と同様、現在時制とgēatでは口蓋化されて[j]となったが、gēat以外の過去時制では口蓋化されず閉鎖音[g]となった。

また２類には現在時制の語根母音にēoではなくūを持つグループもある：brūcan ‘to use’～ brēac ～ brucon ～ brocen（OS brūkan, OHG brūhhan, ModHG brauchen）; būgan ‘to bend’～ bēag ～ bugon ～ bogen（OHG biogan ～ gibogan, ModHG biegen ～ bog ～ bogen ～ gebogen, Go biugan ～ bugans）; lūcan ‘to lock’～ lēac ～ lucon ～ locen（OS lūkan ～ lōk ～ lukun ～ lokan, OHG lūhhan ～ louh ～ luhhun ～ lohhan, ON lūka（後にliūkaも現れる）～ lauk ～ luku ～ lokinn（lukinn), Go lūkan ～ lauk ～ lukun ～ lukans）; slūpan ‘to slip’～ slēap ～ slupon ～ slopen（OHG sliofan ～ slouf ～ sluffun ～ gisloffan, ModHG schliefen ～ schloff ～ schloffen ～ geschloffen, Go sliupan ～ slaup ～ slupun）; sūpan ‘to sup’～ sēap（OHG sūfan ～ souf ～ suffun ～ gisoffan, ModHG saufen ～ soff ～ soffen ～ gesoffen, ON sūpa ～ saup ～ supu ～ sopinn）; sprēotan（sprūtan）‘to sprout’～ sprēat ～ sproten（OS ūtsprūtan）など。

このように現在時制に（Gmc eu>）ēoではなくūが現れる原因ははっきりとしていないようであるが、一般的には１類 Gmc ī ～ ai ～ i ～ i への類推によりGmc eu ～ au ～ u ～ u が ū ～ au ～ u ～ uとなったとされる。しかしこれでは２類の特定の動詞に限ってなぜこのような類推が起こったかについて説明がつかない。このグループは現在時制の語根母音がゼロ階梯を反映する１類 ripan ‘to reap’、３類 murnan ‘to mourn’, spurnan ‘to spurn’、４類 cuman ‘to come’とともにアオリスト現在動詞（aorist-present）と呼ばれるが、異なる点は、２類のこのグループの現在時制が語根母音としてはっきりとゼロ階梯を反映する短母音uではなく、正常階梯eu、auとゼロ階梯uとの中間とも思える長母音 ū を示すということである。あるいはこのグループの語根母音 ū は類推的にeuが ū に取って代わられたのではなく、逆に語根母音はもともと ū だったのであり、後にそれが強変化動詞として２類に組み入れられた結果なのかもしれない。そして動詞によってはある言語ではeuが、またある言語では ū が現れる場合もあり、この場合euは逆に、ū が多数派euに取って代わられた結果である可能性もあるかもしれない。

Connolly（1983：328）は、OE sprēotanはLith spriáudžiu ‘squeeze in’と同根であり、母音度はともにe-階梯であるが、語根母音はIE euではなく喉音の介在するIE eXɪuに由来し、OE sprūtanとsprēotanは互いにアプラウトの関係にあり、sprūtanの ū はIE eXɪuの弱化階梯IE ₑXɪuに由来すると考える。これは確かに２類の ū の１ケースについての説明としては可能であるが、ū を持つ他のすべての動詞の語源的な背景が正確に把握できているわけではない以上、この理論ですべて説明できるかどうかは疑問であり、また ū がIE uXに由来するケースも考えられるであろう。Voyles（1992：259）は、２類の語根母音 ū はゼロ階梯のIE uに由来し、それが後に ū となったのは、それを現在時制の語根はすべて長音節から成るという２類の他の動詞の形態素構造の条件に一致させるためであった可能性もあるとしている。Perridon（2001: 33－36）は、２類の変化表という枠を超えてゲルマン諸語では他の品詞にわたってもeuと ū の交替が多く見られる（そしてau、uを示す交替形を伴うケースもある）ことから、すでにゲルマ

ン祖語において方言によってはeu＞ū の音変化自体があったためと考える。

3類

(a) 語根構造が語根母音プラス鼻音プラス子音のもの：inC ～ anC ～ unC ～ unC (OE bindan ‘to bind’ ～ band ～ bundon ～ bunden, OS bindan ～ band ～ bundun ～ gibundan, OHG bintan ～ bant ～ buntun ～ gibuntan, ModHG binden ～ band ～ banden ～ gebunden, ON binda ～ batt ～ bundu ～ bundinn, Go bindan ～ band ～ bunbun ～ bundans)＜Gmc inC ～ anC ～ unC ～ unC＜IE enC ～ onC ～ n̥C ～ n̥C (Gk pénthos ‘grief’ ～ pépontha ‘suffer’ (完了単数１人称) ～ pépasthe (完了複数２人称)＜*pe-pn̥th-te, épathon (アオリスト)＜*e-pn̥th-on, páskhō (現在)＜*pn̥th-sk-ō ; Gk pémpō ‘send’ ～ pépompha (完了単数)。また現在時制の語根母音 i が IE e に由来することは同根語であるGk pentherós ‘father-in-law’、Lith beñdras ‘companion’ からも明らかであり、これは i はIE eが鼻音プラス子音の前で i になるという音法則の結果である。

bindanの過去時制

	直説法	仮定法
単数１人称	band	bunde
２人称	bunde	bunde
３人称	band	bunde
複数	bundon	bunden
分詞	bunden	

１、２類と同様、直説法単数１、３人称bandの語根母音は完了単数を表すo-階梯 IE *bhondh-に由来し、直説法単数２人称は古ノルド語、ゴート語では語根母音が１、３人称と同一であり、完了の接辞 IE -tha の反映が結合した bazt、banst であるのに対し、古英語ではアオリストに由来すると思われる、語根母音がゼロ階梯の bunde (OS bundi, OHG bunti)＜IE *bhn̥dhes である。直説法過去複数 bundon の語根母音は単数２人称と同じゼロ階梯であるが、完了複数に由来する。仮定法、分詞も１、２類とまったく同様ゼロ階梯に由来する。

bindanの変化表以外でのアプラウトによる古英語の同根語としては、Gmc *bindōn＞binde ‘Binde’ ; Gmc *bandiz＞bend ‘Band, Gefangenheit’ ; Gmc *bandī＞bend ‘Fessel’ ; Gmc *bundan＞bund ‘Bündel’ がある。

OE findan ～ fand ～ fundon ～ funden (OS findan (fīthan) ～ fand ～ fundun ～ fundan, OHG findan (fintan) ～ fand (fant) ～ funtun (fundun) ～ funtan (fundan), ModHG finden ～ fand ～ fanden ～ gefunden, Go finþan ～ fanþ ～ funþun) の語根末子音は他のゲルマン諸語との比較からも明らかなように元来は þ だったのであり、従って古英語の過去複数、過去分詞は語根末子音が音韻法則どおりヴェルネルの法則を反映するfundon、fundenであるのに対し、不定詞、過去単数の本来の発達形としてはWright & Wright (1925[3] : 267) の言うようにOE *fīþan＜*finþan (OE sīþ, Go sinþs ‘way’)、OE *fōþ＜*fanþ (OE ōþer, Go anþar ‘second, other’) が予想されるところであるが、*fīþan、*fōþ のような形は３類の一般的な形からは逸脱したものとみなされたため、bindan ～ band ～ bundon ～ bundenのような一般的な形の影響により、findan、fandという形が形成されたと考えられる。

OE þringan ‘to throng, press’ ～ þrang ～ þrungon ～ þrungen (OS thringan ～ thrungan, OHG dringan ～ drang ～ drungun ～ gidrungan, ModHG dringen ～ drang ～ drangen ～ gedrungen, Go þreihan ～ þraihun ～ þraihans) の場合もゴート語の語形から判断すると、語根末子音は元来 Gmc h であり、従って古英語の場合も本来であれば不定詞は*þrēon＜*þrīon＜*þrīohan (īo は ī が後続の h に起因する割れを受けた結果である)＜*þrīhan＜*þrinhan、過去

単数は*þrōh＜*þranhとなっていたところであろうが、実際には前記の findan、fand の場合と同じ理由によりþringan、þrangという形が形成されたのである。他方、語根末子音がまったくヴェルネルの法則を受けず、それが一貫して無声摩擦音のままであるゴート語の場合、*þrinhan＞þreihanのように不定詞の語根母音が ī となってしまったために３類ではなく１類とみなされるようになった結果、３類本来のゼロ階梯のかつて存在していたであろう過去複数、過去分詞 (*þrunh-＞)*þrūhun、*þrūhansが１類型の (*þrih-＞)þraihun、þraihansという形になったものと考えられる。

また縮約動詞OE þēon ‘to thrive’＜þīon＜*þīohan＜*þīhan＜*þinhanも元来は３類であり、従って本来ならばWright & Wright (265)の言うように、þēon ～ *þōh (＜*þanh) ～ þungon ～ þungenという活用が予想されるが、不定詞の形が１、２類の縮約動詞のものと同一であったことから、過去時制においては３類本来のþungon、þungenが見られるほか、１類に従ったþāh、þigon、þigen、２類に従ったþēah、þugon、þogenも見られる。そして他のゲルマン語においても１類への移行が起こっている (OS thīhan ～ thigun ～ thigan, githigan, OHG dīhan ～ dēh ～ digun ～ gidigan, ModHG gedeihen ～ gedieh ～ gediehen ～ gediehen, Go þeihan ～ þaih ～ þaihun)。

OE irnan ‘to run’ ～ arn ～ urnon ～ urnen (OS rinnan ～ rann ～ runnun ～ runnan, OHG rinnan ～ rann ～ runnun ～ girunnan, ModHG rinnen ～ rann ～ rannen ～ geronnen, ON rinna ～ rann ～ runnu ～ runninn, Go rinnan ～ rann ～ runnun ～ runnans), OE birnan ‘to burn’ ～ barn ～ burnon ～ burnen (OS brinnan ～ brann, OHG brinnan ～ brann ～ brunnun ～ gibrunnan, ON brinna ～ brann ～ brunnu ～ brunninn) は音位転換を受けた形であり、それが古英語では通常現れる形でもあった。また irnan と並び、音位転換のないもとの形 ‘to flow’ を意味する rinnan もあった。そして birnan には音位転換を受けていない過去単数１、３人称 onbran も見られる。

ウェストサクソン方言形の不定詞 irnan、birnan、過去単数 arn、orn、barn、born＜*rann、*ronn、*brann、*bronn＜Gmc *rann、*brann (Gmc a が古英語において後続の鼻音の影響で円唇鼻母音になると land、lond ‘land’、mann、monn ‘man’ のように綴り字は a と o の間で揺れた) の語根母音が音位転換により rC の前にありながら、AFB (Anglo-Frisian Brightening、アングロ・フリジア明音化) によるæへの前舌化とそれに続く i＞io、æ＞ea という割れを示さないのは、Campbell (1959：60)、Brook (1978[5]：16) の言うように、音変化がAFB、割れ、音位転換の順に働いたためであろう。すなわちirnan、birnanは*rinnan、*brinnan＞(AFBは不適用) *rinnan、*brinnan＞(割れは不適用) *rinnan、*brinnan＞(音位転換)＞irnan、birnan、そして arn、barn は *rann、*brann＞(AFBは鼻音の前で鼻音化された a には不適用) *rann、*brann＞(割れは不適用) *rann、*brann＞(音位転換)＞arn、barnという順に音変化が働いた結果であり、結局この場合ウェストサクソン方言では音位転換のみが適用可能であったことになる。

アングリア方言には割れを受けた iornan、eornan、biornan、beornan という形が見られるが、Campbell (60) の言うように、これはアングリア方言ではウェストサクソン方言とは逆に音位転換が割れに先立って働いたためと考えられる。

後にウェストサクソン方言にも割れによる結果音と同じ ea を示す過去単数１、３人称 earn、bearn が現れるが、Campbell (60) はこれは同じ３類の過去単数wearþ ‘became’ への類推によるものと考える。また過去分詞では、語根母音が u の a-ウムラウトによる o を示す*ornen、*bornen ではなく、a-ウムラウトを阻止する鼻音プラス子音 (nn) が後続していた、すなわち音位転換以前の*runnen、*brunnen の段階と同じ u のままの urnen、burnen となっているのは、Quirk & Wrenn (1957[2]：141) の言うように、u の a-ウムラウトが働いた時期が音位転換以前であったからであろう。

(b) 語根構造が語根母音プラス流音 l プラス子音のもの：elC ～ ealC ～ ulC ～ olC (OE helpan ‘to help’ ～ healp ～ hulpon ～ holpen, OS helpan ～ halp ～ hulpun ～ giholpan, OHG helfan ～ half ～ hulfun ～ giholfan, ModHG helfen ～ half ～ halfen ～ geholfen, ON hialpa ～ halp ～ hulpu ～ holpinn, Go hilpan ～ halp)＜Gmc elC ～ alC ～ ulC ～ ulC＜IE elC ～ olC ～ l̥C ～ l̥C (IE l̥＞Gmc ul＞ul, ol：OE, OS wulf ‘wolf’, OHG wolf, ModHG Wolf, ON ulfr, Go wulfs＜Gmc *wulfaz＜IE *wl̥kʷos (Skt vr̥kas))。現在形のうち直説法単数２、３人称だけが hilpst、hilpþ (OS hilpis、hilpid、OHG hilfis、hilfit、ModHG hilfst、hilft) のように語根母音に e ではなく i を持つのは、語根後位置の-st、-þ がかつて -ist、-iþ であったために起こった i-ウムラウトの結果である。

helpanの過去時制

	直説法	仮定法
単数１人称	healp	hulpe
２人称	hulpe	hulpe
３人称	healp	hulpe
複数	hulpon	hulpen
分詞	holpen	

直説法単数１、３人称 healp は完了単数を表すo-階梯の Gmc *halp に由来するが、語根母音 eaはAFB によるæが後続の lC の影響による割れを受けた結果である。直説法単数２人称は古ノルド語、ゴート語では語根母音が１、３人称と同一であり、完了の接辞 IE -tha の反映が結合した halpt であるのに対し、古英語ではアオリストに由来すると思われる、語根母音がゼロ階梯の hulpe (OS hulpi, OHG hulfi) である。直説法過去複数 hulpon のゼロ階梯の語根母音は完了複数に由来し、仮定法、分詞の語根母音もゼロ階梯に由来する。

縮約動詞であり、従ってヴェルネルの法則に由来する子音交替を示すものに fēolan ‘to press on’ ～ fealh ～ fulgon、fǣlon ～ folen (ON fela ～ fal ～ fǫlu ～ folginn, Go filhan ～ falh ～ fulhun ～ fulhans) があり、fēolan は WGmc *felhan＞(割れ)POE *feolhan＞(流音と母音の間の語根末子音 h の消失とそれの伴う語根母音 eo の代償延長) fēolan という音過程の結果である。後続の lC は OE healp のように Gmc a＞OE æに対しては C が何であっても割れを引き起こしたが、Gmc e に対しては C が何であるかにより、OE helpanとPOE *feolhan のような違いが起こっている。過去複数には３類本来の fulgon が見られるほか、語根末子音群 lg のうちヴェルネルの法則に由来する語根末子音 g が語根末子音に l のみを残す不定詞 fēolan への類推により放棄された結果、４類と同じく語根母音と接辞との間が単子音 l のみとなったために語根母音としてもまた４類型のものが類推的に導入された fǣlon という形も見られる。過去分詞も本来予想される*folgen (ON folginn) ではなく、過去複数と同様４類型の folen という形になっている。ゴート語では過去分詞としては接辞 -ans (＜IE -onos) を持つ通常の fulhans と並び、接辞としては -ans とアプラウトの関係にある -ins (＜IE -enos) を持ち、しかも語根末子音がヴェルネルの法則を反映し、形容詞として定着した fulgins という形も見られる。

語頭子音が(Gmc [γ]＞) OE [g]、[j]の交替を示すものとして gieldan ‘to pay’ ～ geald ～ guldon ～ golden (OS geldan ～ guldun ～ goldan, OHG geltan ～ galt ～ gultun ～ gigoltan, ModHG gelten ～ galt ～ galten ～ gegolten, Go gildan ～ guldans)；giellan ‘to yell’ ～ geall ～ gullon (OHG gellan ～ gullun, ModHG gellen)；gielpan ‘to boast’ ～ gealp ～ gulpon ～ golpen (MHG gelfen) がある。現在時制では語頭子音はすべて [j] であり、過去時制では直説法過去単数１、３人称においてのみ [j] であり、それ以外の過去時制では語根母音が後母音 u、o であったため [g] であった。不定詞では[γ]は前母音である語根母音 (Gmc e＞) POE e の影響により口蓋化されて [j] となり、続いて語根母音 e

が逆にこの先行の[j]の影響により ie に二重母音化された結果、gieldan、giellan、gielpan となったのであり、これは語頭口蓋音による二重母音化(palatal diphthongization)と呼ばれる音変化である。

ただし直説法過去単数１、３人称では、語根母音 Gmc a が AFB によりæへと前舌化され、そして上記の不定詞の場合と同様の音過程により、すなわち語頭子音［γ］がこの前母音æの影響により口蓋化されて［j］となり、そしてæがこの［j］の影響により ea に二重母音化された結果 geald、geall、gealp となったのか、あるいは ea は後続の lC による割れの結果なのかが問題となるが、一般には後者の見方が支持されており、割れは語頭口蓋音による二重母音化に先立って起こったとされる。すなわち音変化の年代順としては①a＞æ (AFB)、②割れ、③次音節の後母音の影響によるæ＞a、④口蓋化、⑤語頭口蓋音による二重母音化であったと考えられる。例えば slēan ‘to slay’ が*slahan(OS,OHG,Go slahan＞(①により) *slæhan＞(②により) *sleahan＞(③は不適用) *sleahan＞slēanという音過程の結果であったことは明らかであろう。もし逆に③、②の順序であったと仮定すると、*slæhan＞(③により) *slahan＞(②は不適用)*slahan＞*slānとなってしまうことから、②が③に先立つ音変化であったことは明らかであろう。次に③、④、⑤の順序についてであるが、例えば*[γat]＞(①により) *[γæt]＞(④により) *[jæt]＞(⑤により) geat [jæat]‘gate’の主格対格単数 gatuは*[γatu]＞(①により) *[γætu]＞(③により) *[γatu]＞(④、⑤は不適用)＞gatu という音過程の結果であったと考えられる。もし④、⑤、③の順序であったと仮定すると、*[γatu]＞(①により) *[γætu]＞(④により) *[jætu]＞(⑤により) *[jæatu]＞(③は不適用) *geatu [jæatu]となってしまい、またもし④、③、⑤の順序であったと仮定すると、*[γætu]＞(④により) *[jætu]＞(③により) *[jatu] ＞(⑤は不適用) *[jatu]となってしまう。

以上のことから①－②－③－④－⑤の順序であったと推定することが可能であり、従って②(割れ)が⑤(語頭口蓋音による二重母音化) に先立つ音変化であったと考えられる。すなわちgeald、geall、gealp の ea は healp の ea と同様、②(割れ) による結果音であったということになる。

(c)語根構造が語根母音プラス流音 r プラス子音のもの：eorC ～ earC ～ urC ～ orC (OE weorpan ‘to throw’～ wearp ～ wurpon ～worpen, OS werpan ～ warp ～ wurpun ～ worpan, OHG werfan ～ warf ～ wurfun ～ giworfan, ModHG werfen ～ warf ～ warfen ～ geworfen, ON verpa ～ varp ～urpu ～ orpinn, Go wairpan ～ warp ～ waurpun ～ waurpans)＜Gmc erC ～ arC ～ urC ～ urC＜IE erC ～ orC ～ r̥C ～ r̥C (Gk dérkomai ‘I see’～ dédorka, Skt dadarśa (完了単数１人称) ～ dadr̥śima (完了複数１人称), Gk édrakon, Skt adr̥śan (アオリスト))。 不定詞の語根母音 eo は後続の r プラス子音による割れの結果であり、現在形のうち直説法単数２、３人称だけが OE wierpst、wierpþ (ModHG wirfst、wirft) のように eo の代わりに ie を持つ原因は語根後位置の -st、-þ が -ist、-iþ であったために起こった i-ウムラウトにある。すなわちこれは*werpist、*werpiþ＞(i-ウムラウト)*wirpist、*wirpiþ＞(割れ)*wiorpist、*wiorpiþ＞(i-ウムラウトと中略) wierpst、wierpþ という音過程の結果であったと考えられる。過去時制の語根母音はすべて helpan のそれと同一であり、wearp の ea は AFBによるæが後続の rC による割れを受けた結果である。

語根末子音がヴェルネルの法則に起因する子音交替を示すものにweorþan ‘to become’～ wearþ ～ wurdon ～ worden (OS werthan ～ warth ～ wurdun ～ wordan, OHG werdan ～ ward ～ wurtun ～ giwortan, ModHG werden ～ wurde ～ wurden ～ geworden, ON verþa ～ varþ ～ urþum ～ orþinn, Go wairþan ～ warþ ～ wauþun ～ wauþans, Lat vertere ‘to turn’, Skt vartāmi ‘wende’) がある。wearþ では語根末の þ は語末にあったためゲルマン祖語の無声摩擦音［θ］のままであったが、weorþanではそれが古英語において有声子音と母音との間で有声化された結果音［ð］であった。そしてゼロ階梯の形における d は、Gmc［θ］＞(ヴェルネルの法則)Gmc［ð］＞WGmc［d］という音過程の結果であり、印欧祖語におけるアクセントの位置の相違に起因するその背景は、対応する Skt vártāmi ～ vavárta

(OE wearþ) ～ vavr̥timá (複数１人称、従って厳密には OHG wurtum、ON urþum、Go wauþumが対応) ～ vr̥tānás (OE worden) に見ることができる。

語頭子音の交替を示すものとしては ceorfan ‘to carve’(MHG, ModHG kerben) ～ cearf ～ curfon ～ corfen＜Gmc *[kerß-]＜IE *gerbh- (Gk gráphein ‘to scratch, draw, write’) があり、不定詞、直説法過去単数１、３人称では割れを受けた語根母音 eo、ea の第１要素である前母音の影響で語頭子音 [k] は口蓋化され [tʃ] となっているが、ゼロ階梯の過去時制では語根母音が後母音 u、o であったため無変化であった。また語根末の f は、不定詞、過去複数、過去分詞では有声子音と母音との間にあったため有声音 [v] であったが、cearf では語末にあったため無声音 [f] であった。

このほか、語根母音と語根末子音との間に位置する要素が鼻音でも流音でもなかったという点では３類の基本的な語根構造からは逸脱しており、Campbell (303)、Hogg (1992：153) の言うように本来はむしろ５類であったのではないかとも思えるが、語根母音が Gmc e ～ a ～ u ～ u を反映しているという点では３類に分類される次のような動詞群がある：feohtan ‘to fight’～ feaht ～ fuhton ～ fohten (OS fehtan, OHG fehtan ～ faht ～ fuhtun ～ gifohtan, ModHG fechten ～ focht ～ fochten ～ gefochten)；bregdan ‘to brandish’～ brægd ～ brugdon ～ brogden (OS brugdun, OHG brettan ～ bratt ～ bruttun ～ gibrottan, ON bregþa ～ brā ～ brugþu ～ brugþinn, brogþinn)；stregdan ‘to strew’～ strægd ～ strugdon ～ strogden；berstan ‘to burst’～ bærst ～ burston ～ borsten (OS brestan ～ brast ～ brustun, OHG brestan ～ brast ～ brustun (brāstun) ～ gibrostan, ModHG bersten ～ barst ～ barsten ～ geborsten, ON bresta ～ brast ～ brustu ～ brostinn)；þerscan ‘to thresh’～ þærsc ～ þurscon ～ þorscen (OHG dreskan ～ druskun ～ gidroskan, ModHG dreschen ～ drosch ～ droschen ～ gedroschen, Go þriskan)；frignan (方言によっては fregna もある) ‘to ask’～ frægn ～ frugnon ～ frugnen (OS fragn (frān, frang) ～ frugnun (frognun), ON fregna ～ frā ～ frǫgu ～ freginn, Go fraihnan ～ frah ～ frēhun ～ fraihans, Lat precor ‘bitten’～ procus ‘suitor’, Skt pr̥cchati ‘fragt’)；flohten (OS flehtan ‘flechten’～ giflohtan, OHG flehtan ～ flaht ～ fluhtun ～ giflohtan, ModHG flechten ～ flocht ～ flochten ～ geflochten)。

語根に流音も鼻音も含まない feohtan の場合は明らかに、過去複数、過去分詞の Gmc u はゼロ階梯において流音、鼻音の音節主音的異音が純粋に発達させた３類本来のものではなく、語根構造が特に逸脱していたとも思えるこの動詞は結局３類に組み込まれた結果、３類型の母音交替に従ったに過ぎないものと考えられる。

berstan、þerscan は *brestan、*þrescan が音位転換を受けた結果であり、前者には過去複数に burston のほか音位転換を受けていない brustæn があり、後者にも音位転換を受けていない þrescenne がある。語根母音に rC が後続していたことから本来ならば語根母音が割れを受けた不定詞 *beorstan、*þeorscan、直説法過去単数１、３人称 *bearst、*þearsc という形が予想されるところであるが、実際には不定詞の語根母音は e のままであり、直説法過去単数１、３人称のそれも AFB のみを反映するæを示す bærst、þærsc となっているのは、割れが音位転換に先立って起こっていたためであろう。これらは音位転換以前にその語根母音に後続していた子音から判断すると、本来確かに５類に近いと考えられる。また古英語以外の例ではあるが、OE berstan に対応する OHG brestan には現に過去複数としては３類型の brustun のほか４、５類と同じ語根母音を示す brāstun という形もある。

Go fraihnan、ON fregna は同根である OE frignan とは異なり、依然としてもとの５類の語形変化を示している。そして語根 (IE *prek-＞) Gmc *freh- ‘to ask’ の後位置の n はもともと現在時制を表す挿入辞であり、この鼻音挿入辞は他の語派の特定の動詞にも見られる(Lat sternō ‘breite hin’ (完了形strāvī), linquō ‘leave’ (完了形līquī), vincō ‘defeat’ (完了形vīcī), Gk dáknō ‘beiße’ (アオリストédakon))。ゴート語と古ノルド語もこの鼻音挿入辞を本

来の姿として現在時制にのみ保持しているが、古英語と古サクソン語ではそれは過去形、過去分詞にも及んでおり、語根末子音もヴェルネルの法則を反映する g をすべての形に一般化している。Wright & Wright (269) の言うように、古英語でもゴート語と古ノルド語のようにこの動詞が５類本来のパターンを継承していたならば、その本来の発達形は*frēonan (＜*freohnan＜*frehnan) ～ *freah (＜*fræh＜*frah) ～ *frāgon (*frǣgon) ～ *fregen となっていたのではないだろうか。

feohtanは別として、３類型の母音を示すこの動詞群の共通点は、ゲルマン祖語において語根母音と語根末子音との間の子音が鼻音でも流音でもなかった代わりに、語頭の子音結合のうち語根母音にじかに接する子音が流音であったという点であり、さらに３類として定着することにつながるような本来の３類との類似点と言えそうなものがもともとあったとすれば、流音が後続ではなく先行という違いはあったにせよ、それが語根母音にじかに接していたという点であろう。Voyles (259) の指摘からも言えるように、bregdan が IE *bhregdh- に由来するという前提に立てば、語根母音に Gmc u を持つ過去複数と過去分詞は IE *bhr̥gdh- に由来することになり、本来ならばそれは Gmc *brugd- (＞OE brugdon、brogden) ではなく Gmc *burgd- (＞OE *burgdon、*borgden) となってしまうところであるが、正常階梯の現在形と直説法過去単数１、３人称は r が語根母音に後続ではなく先行するという語根形態素を持つ以上、Gmc *burgd- はその点では逸脱した形であったと考えられる。既にBanta (1964) も、語根が正常階梯において r、l プラス母音という配列を含んでいる場合、ゼロ階梯 r̥、l̥ はその影響で ur、ul ではなく ru、lu となったとしており、もしこの見解に従うならば、brustæn；strugdon、strogden；flohten；frugnon、frugnenという形についても説明がつくであろう。そして(IE *prek-＞) Gmc *freh- の強変化動詞以外のゼロ階梯の同根語として、古英語以外の例ではあるが、強変化動詞でのような ru ではなく逆に ur を反映する OHG forsca ‘Forschung, Frage’、forscōn ‘fragen, forschen’、ModHG forschen＜Gmc *furh-skō-＜IE *pr̥k- (Skt pr̥cchati) という形もある。

ON fregna、Go fraihnan は語根母音 Gmc e を保持しており、古英語でも方言によっては fregna という形はあるものの、frignan における語根母音 i の原因ははっきりとしないようであるが、それは j- 現在動詞形 *fregnjan に由来するものかもしれない。また frignan、frægn の g は前母音の後で (Gmc [γ]＞) [j] となっていたため、この g は消失するとともに先行母音の代償延長が起こった結果 frīnan、*frǣnとなり、さらに frīnan では語根母音が１類と同一であったため、直説法過去単数１、３人称では frān、そしてまれに過去複数、過去分詞にも frinon、frinen という１類型の形も生まれた。g の消失とそれに伴う代償延長は後母音とその後位置の g[γ] を持つ frugnon、frugnen にも類推的に及んだため、frūnon、frūnen という形も現れた。同様の現象は bregdan、stregdan にも起こった結果、brēdan ～ brǣd ～ brūdon ～ brōden、strēdanという形も見られる。

【参考文献】

Banta, F. G. 1964. “Gothic reflexes of PIE syllabic resonants.” *Linguistics* 6, 29-36.

Brook, G. L. 1978[5]. *An introduction to Old English*. Manchester：Manchester University Press.

Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford：Oxford University Press.

Connolly, L. A. 1983. “Germanic *r*-preterites.” *JIES* 11, 325-38.

Heusler, A. 1967[7]. *Altisländisches Elementarbuch*. Heidelberg：Winter.

Hogg, R. M. 1992. “Phonology and morphology.” *The Cambridge history of the English language. I：The beginnings to 1066* (R. M. Hogg, ed.), 67-167. Cambridge：Cambridge University Press.

Holthausen, F. 1974[3]. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg：Winter.

Krahe, H. & W. Meid. 1969[7]. *Germanische Sprachwissenschaft. I , II*. Berlin : de Gruyter.

森　基雄. 2000.「古英語強変化動詞（Ⅰ）」『奈良産業大学紀要』第16集, 129-37.

森　基雄. 2001.「古英語強変化動詞（Ⅱ）」『奈良産業大学紀要』第17集, 123-32.

森　基雄. 2004.「古英語強変化動詞（Ⅲ）」『奈良産業大学紀要』第20集, 61-68.

Perridon, H. 2001. "On the origin of *ū* in verbs of the type *lūkan*." *Zur Verbmorphologie germanischer Sprachen* (S. Watts et al., eds.), 29-37. Tübingen : Niemeyer.

Quirk, R. & C. L. Wrenn. 1957[2]. *An Old English grammar*. London : Methuen.

Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague : Mouton.

Voyles, J. B. 1992. *Early Germanic grammar : pre-, proto-, and post-Germanic languages*. San Diego, etc.: Academic Press.

Wright, J. & E. M. Wright. 1925[3]. *Old English grammar*. Oxford : Oxford University Press.